

白き山

観劇の参考に資料をご用意いたしました。

劇前にお読みになっても作品を楽しんでいただくのに問題はございません。

ただ、一部作品の内容と関わっている部分もございます。

全く前情報なしでご覧になりたいお客様にはお勧めできません。

ご了承ください。

- ◆ 参考文献 ◆
- ◆ 関連年表 ◆
- ◆ 用語集 ◆
- ◆ 引用歌集 ◆

参考文献

『白き山』の執筆・構想に際し、以下の書籍を参考にいたしました。

作者・編者及び著作権保持者に心より厚く御礼を申し上げます。

北杜夫 『楡家の人びと』

『青年茂吉』

『壮年茂吉』

『茂吉彷徨』

『茂吉晩年』

『どくとるマンボウ青春記』

『どくとるマンボウ医局記』

『どくとるマンボウ昆虫記』

『どくとるマンボウ追想記』

『人間とマンボウ』

『母の影』

斎藤茂太 『茂吉の体臭』

『回想の父茂吉 母輝子』

『精神科医三代』

『快妻物語』

斎藤茂太・北杜夫 『この父にして一素顔の斎藤茂吉』

斎藤美智子 『「感謝」する人 茂吉、輝子、茂太に仕えたヨメの打ち明け話』

斎藤由香 『猛女とよばれた淑女—祖母・斎藤輝子の生き方』

品田悦一 『斎藤茂吉 あかあかと一本の道とほりたり』

小泉博明 『斎藤茂吉の人間誌』

加藤淑子 『山口茂吉』

斎藤茂吉関連年表

※今作『白き山』での年表でありフィクションです。

現実の茂吉氏とは違う個所もあります。

1882年（明治15年）5月

山形県南村山郡金瓶村に出生。本姓は守谷。

1895年（明治28年）

同郷で親戚の医師斎藤紀一の養子候補になる。上京し斎藤家に
寄寓する。

1898年（明治31年）

この頃より短歌を自己流で作るようになる。

1905年（明治38年）

正岡子規の遺稿『竹乃里歌』を読み、強い影響を受ける。同年、
東京帝国大学医科大学に入学。

1906年（明治39年）

子規の弟子、伊藤左千夫の弟子になる。

1908年（明治41年）

子規派の雑誌『アララギ』創刊。茂吉も短歌を発表するようになる。

1910年（明治43年）

東京帝国大学医科大学卒業。

1913年（大正2年）5月

生母いく死去。連作『死にたまふ母』発表。

7月

伊藤左千夫死去。

10月

第一歌集『赤光』刊行。大きな反響を巻き起こす。

1914年（大正3年）

斎藤紀一の長女輝子と結婚。斎藤家の婿養子となる。

1916年（大正5年）

長男茂太出生。

1917年（大正6年）

長崎医学専門学校精神病科教授になり長崎へ転所。

1918年（大正7年）

次男宗吉出生。

1920年（大正9年）

長女百子出生。

1921年（大正10年）

精神病学研究のため欧州留学へ出発。

1924年（大正13年）12月

養父紀一の青山脳病院が火事で全焼。

1925年（大正14年）1月

留学より帰国。病院の再建に奔走。

1927年（昭和2年）

養父紀一が引退し、青山脳病院院長を継ぐ。

1928年（昭和3年）

紀一死去。家督は紀一の実子に譲るが、病院経営は全て茂吉
が負うことになる。

1929年（昭和4年）

次女昌子出生。

1933年（昭和8年）

妻輝子の醜聞が報道される。夫妻別居。

1934年（昭和9年）

この年より医師としての診察は週一回程度になる。

1937年（昭和12年）

日中戦争の勃発以後、数多くの戦争の短歌を詠むようになる。

1944年（昭和19年）

茂太・宗吉応召。二人とも陸軍病院に。

1945年（昭和20年）3月

戦争の激化により妻輝子との別居を解消。

4月

故郷金瓶へ疎開。妹の嫁ぎ先の離れを借りる。

5月

東京大空襲で青山の自宅・病院全焼。

8月

敗戦。空襲後疎開していた妻と次女を東京に帰す。

用語解説

※古川流の解釈です

※項目内の順番は登場順

人物

トーマス・マン ドイツ出身の小説家。茂吉の次男宗吉に大きな影響を及ぼした。

お母様・輝子（斎藤輝子） 茂吉の妻。医師斎藤紀一の娘。大病院の娘であり、上流階級としての教育を受ける。非常に強い性格の女性として知られる。婿養子である茂吉と四人の子供をもうけるが、必ずしも円満ではなく、昭和8年のスキャンダルを契機に十年以上別居生活を送る。

高村光太郎 日本の詩人・彫刻家。『道程』で知られる。

正岡子規 日本の歌人・俳人。その35年の短い生涯の中で、近代短歌・近代俳句の成立に大きく寄与する。特徴は写生を尊いとしたこと。また古今和歌集より万葉集を高く評価していた。

伊藤左千夫 日本の歌人。子規の門人。アララギ派の事実上の創設者。

赤彦（島木赤彦） 日本の歌人。佐千夫の門人。佐千夫の死後、アララギ派を引き継ぐ。

鉄幹（与謝野鉄幹） 日本の歌人。雑誌『明星』で知られる。

晶子（与謝野晶子） 日本の歌人。鉄幹の妻。

白秋（北原白秋） 日本の詩人・童謡作歌・歌人。

啄木（石川啄木） 日本の歌人。『一握の砂』で知られる。

板垣君（板垣家子夫） 山形県大石田在住のアララギ派歌人。疎開中の茂吉を世話したことで知られる。

松尾芭蕉 江戸時代の俳人。『奥の細道』で東北の俳句を多数残している。

与謝蕪村 江戸時代の俳人。死後、正岡子規から高く評価された。

地名

蔵王連峰 宮城県、山形県の南部県境に位置する複合火山群。かつては修験道の修行地であり、周辺の人々の信仰の対象であった。

最上川 山形県内を流れる川。かつては河川舟運の道として周辺の経済に大きく寄与していた。風光明媚な川としてよく知られている。

鳥海山 山形県・秋田県にまたがる活火山。蔵王と同じく修験道の修行場であり、周辺の信仰の対象であった。

短歌に関すること

戦争詠み 戦争に関する短歌。日中戦争以後、日本政府は文学も動員し、国民の戦意高揚に利用しようとした。その為に、多くの文学者が戦争を讃美する作品を残している。

赤光（しゃっこう） 斎藤茂吉の第一歌集。その新しい歌風が大きな反響を巻き起こし、近代短歌の発展に大きな影響を及ぼした。

アララギ・アララギ派 正岡子規の歌論を信奉し短歌結社『アララギ』に拠った歌人たちをアララギ派と称する。

伊藤左千夫、島木赤彦、斎藤茂吉が代表的な歌人である。

写生・実相観入 写生はアララギ派の理論。写生に徹した歌こそ素晴らしいというのが子規の歌論であった。斎藤茂吉はその写生を更に深め、それを表す言葉が実相観入である。観る物に自分の命・心を投影し、それを写すという歌論である。これによって茂吉は狭隘な写生主義を抜け出し、新しい歌風を確立することができた。

竹乃里歌 子規が作った短歌等を集めた稿集。少年時代の茂吉がこれに影響を受け歌人を志す。

明星・明星派 アララギとは違う短歌の流れ。与謝野鉄幹・晶子夫妻が有名。

あらたま 斎藤茂吉の第二歌集。赤光と共に茂吉の初期の名歌集として知られる。

その他

お父様・お兄様 斎藤家の丁寧な言葉遣いは、茂吉の妻輝子の通っていた学習院に由来する。幼児は両親のことをパパ様・ママ様と呼んでいた。

雷 斎藤茂吉はその激しい性格を表すエピソードに事欠かない。時には雑誌等の文学上の議論がエスカレートし、相手を徹底的にやりこめようとする文章が残っている。

青山脳病院 茂吉の養父紀一が作った精神科の大病院。東京都青山にあった。紀一の趣味で洋風の立派な建物であったが、1924年に失火により全焼。茂吉の努力により世田谷区松原に復興。青山には分院ができる。やがて戦争の激化により本院は買収され、分院は空襲で再び全焼した。流れを汲む斎藤病院は現在も存在している。

昭和8年の醜聞 ダンスホールの講師が、多くの上流階級の夫人との性的関係を持ったとされ逮捕された事件。スキャンダルとして大きく報道された。斎藤茂吉夫人である輝子はその相手の一人であるとも報道された。

病目（やんめ）のお不動様 山形県黒沢温泉近くにある不動尊。眼病にご利益があると信仰を集めていた。

テーベー 肺結核の俗称。ドイツ語に由来する。

ストレプトマイシン 1943年アメリカで誕生した抗生物質。結核の治療に用いられた最初の抗生物質である。戦後数年は密輸品として日本にも輸入される。

『白き山』引用歌集

作品中に出てくる短歌・俳句を登場順に一覧にしております。

この場をお借りして各作者、特に斎藤茂吉氏に敬意と感謝の意を表します。

※特記のないものは全て斎藤茂吉の短歌です

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

罪惡のほろびむとする轟音にシンガポール落つシンガポール落つ

死骸の如き歌累々とよこたはるいたしかたなく作れるものぞ

たざりたる炎をつつみ堪へしのびこらへ忍びこの国民(くにたみ)ぞ

東京に妻をかへして一人なる旅館の部屋に仕事を急ぐ

／ 山口茂吉

ははが目を一目を見んと急ぎたるわが額(ぬか)のへに汗いでにけり

死に近き母に添い寝のしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり

蔵王山に雪かも降るといひときはや斑なりといらへけらずや

ひむがしに直(ただ)に向ふ岡に上り蔵王の山を目守りて下る

五月雨をあつめて早し最上川

／ 松尾芭蕉・俳句

五月雨や大河を前に家二軒

／ 与謝蕪村・俳句

蔵王より離(さか)りてくれれば平けき国の真中(もなか)に雪の降る見ゆ

ながらへてあれば涙のいづるまで最上の川の春ををしまむ